

616.3-D257



1200500749147

6.3
25

讀書第四

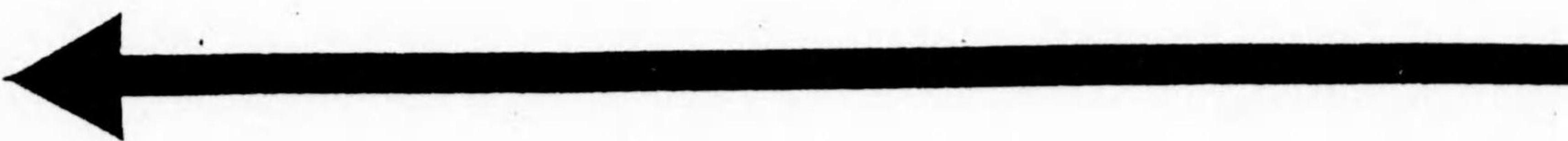
賀壯年

麥

中央本部編



始



917
294

翼贊壯年叢書

45
麥

中央本部編

大日本翼贊壯年團發行

616.3
D25



目次

はしがき	三
明治以前の麥	三
明治以後の麥	五
昭和の麥 その一	二
昭和の麥 その二	二
拓かれた増産突撃路	五
何を學ぶべきか	一八
團運動と麥	二〇
増産ただ一路	二四
大日本蠶贊壯年團食糧(主として麥)増産要綱案	二六
附全國麥作(廣幅播種)普及狀況(昭一九・六・一五)	二六

發行所寄贈本





刈 麥 式 幅 廣

はしがき

麥は廣幅うすまきを根幹とする多收穫栽培法が廣く、大きな成功をもたらした。都下東村山のこの麥作りを見た内田農商大臣も大喜びで、農商省としても本腰をいれるといふ。麥作もやうやく全國的に軌道に乗り出した。この際われわれ全國員は誰でも麥についての一應の知識と、麥と團運動の關係とを知つてゐなければならぬ。栽培技術についてはさきに伊藤恒治氏の著書でわれわれは知識を興へられ實地にこれを活かしてゐるが、これよりもつと廣汎な麥そのものについてもつと知るところがありたいと思ひ、本輯を團員諸氏におくる。内容は伊藤氏について訊ね、中央本部で編輯した。いまだ十分とはいへぬ點もあるが、十全に利用されんことを望む。

明治以前の麥

日本の麥は饑饉時等の非常時食用食糧として出發した。その保存に安全であり、且つ殆ど不作を見ないといふ麥の性質では、この出發は當然であらう。上古、特に朝廷におかせられては貧民の賑恤救濟、或は非常時の備荒救急の深き思召を以て、麥作の積極的獎勵に御盡力遊ばされたのである。而も、奈良朝以後は、この方針は當時の農業政策を一貫した流れであつた。これを今、年代的に見て行くと

▽元正天皇の御代饑饉に備へて、百姓には麥と粟を兼種せしめ、男一人毎に作付面積を二段と決められ

た。
△養老三年——穀を積み、以て水旱に備へんが爲に、諸國の國司をして百姓に勤めてそば、麥類を栽培せしめた。

▽嵯峨天皇の御代——麥は米の不足を補ふ唯一の穀物であるとして、大小の麥を植ゑるようにならぬと勸められた。即ち天下諸國の百姓にこれを奨励し、その擔當者の氏名を朝集使に報告せよといふ嚴しい命令が出された。當時、農民の知識程度は低く、麥の耕種の時期さへ辨へぬといふ有様であつたから、役人をしてその指導に當らしめた。例へば、仲秋の月に麥を植ゑるようにならぬと勸め、時を失してはならぬ。その時を失することあれば罪に問ふ——といふ嚴命と同時に、耕種するも、その時を失へば勞力を空しく費多くして實を採ることが出来ぬ——と優しく教へられた。

▽仁明天皇の承和六年——この年には麥を青苗の儘刈り取つて牛馬の飼料としたり、或は他に賣却する者が多かつた。そこで、大小麥はその耕種に勞力少なく、夏早く熟して急を支ふる力が多い、若し青苗を刈らずにこれを成熟せしめたならば、貧賤の民はこれが爲に飢を免れることが出来る——といふ御告諭が發せられ、牛馬の飼料とすることを禁ぜられた。

このやうな指導の下に收穫された麥はその若干が上納され、富める者よりわかちて貧しき者を救はうといふ主旨で設けられた義倉に常々蓄積されて、賑恤救済或は備荒救急の用に充てられたのであつた。

中世以降つても麥はやはり饑饉對策用の非常食糧として眺められてゐるが、この時代は前時代と異つて、その耕種は積極的に採用されて來た。即ち稻の不作がしばしば饑饉を招來した結

917
294

果、食糧生産を水稻耕作にのみ依存してゐては常に不安であるといふ理由から、やゝ麥作の發展を盛ならしめたのであつた。その推進力は僧侶達であつた、當時、佛教勢力は各地に弘まり、それに伴つてその寺領も殖えていつたのである。

近世に入り、麥は非常時食用食糧としてだけでなく、亦平時用即ち常食用としてその重みを加へた。徳川時代にあつては特に百姓の暮し向についてはこまごました法令が布かれ、その贅澤が戒められた。その日常生活は粗衣粗食に甘んずるやうに仕向けられ、常に饑饉等の災害に耐へ得る態勢を執らしめようとしたのであつた。即ち食糧に關しては強制的に節米を勵行せしめ、麥食及び雜穀食を常食とするようにならされた。が、これにはもつと重大な意味が含まれてゐた。米の消費者たる武士階級は己の食糧を確保する爲には、農民に雜穀を食用せしめて米の上納に完壁を期する必要があつたのである。

斯くて江戸時代には、全農家が麥乃至雜穀を常食とするやうになり、麥の主食糧としての日常性は漸次増大していつた。

明治以後の麥

明治時代は江戸時代の麥をその儘繼承した。

静岡縣引佐郡鎮玉村地方では、古老の話に依ると、明治二十年頃には麥一升に米約三合の割で混ぜ合せたものを常食としてゐた。而も、子供のある家庭では、釜の底部に麥の二分の一を入れ、その上に米を載せて更に残り半分の麥をその米の上に置いて炊飯した。かうして炊き上

げたのを、米の分だけ全部子供に與へ、大人は殆ど麥だけを食してゐた。それが漸次食生活が向上して米の混合量が増加され、大正の初期には麥一升に米五合の割合となつたが、一般にはなほ麥を多く用ひる習慣が残つてゐたのである。この習慣が單に鎮玉村だけのものではなく全國的なものであつたことは、明治十一年から大正二年にかけて麥の作付面積が累年増加してゐる事實に徴しても推斷されることである。

麥の作付面積は大體において、大麥・稗麥についていへば、明治十一年から毎年上昇線を辿つてきたが大正二年を峠として昭和十四年迄は下向の一途を奔つてゐる。今、この三つの年の數字を見るならば

	大麥	稗麥	小麥
明治十一年	五九四、二三〇	四二四、五九二	三四六、八〇〇
大正二年	六二四、一二七	七二〇、八四三	四八三、四五九
昭和十四年	三五五、八九一	三六九、六六〇	七四五、六〇二

この間、明治の後期から大正の初期に亘つては麥作研究が特に活潑であり、正に日本の麥作黄金時代とも稱すべき時期であつた。埼玉に在つて老農權田愛三氏が今日有名な單條廣播法を創案し、權田式麥栽培法として唱道普及に努めたのは明治の後期であつた。更に大正に入つては、香川の吉田顯基氏が複條廣播法を完成した。これは吉田式麥栽培法をして香川、愛媛の兩縣に遍く普及された。當時わが國の麥作栽培法は大いに飛躍的進歩を遂げ、その成績にも亦見るべきものが多かつたのである。

然るに、第一次歐洲大戰は日本の生活の凡ゆる面にその經濟的足跡を深く印していつた。戦後のいはゆる商業資本の擡頭は全面的に國民生活に變革を與へた。農家でも麥を食する者は著しく減少し、従つてその消費量も頓に少くなり、これに反して米の消費量は俄かに激増していつた。

麥作の峠であつた大正二年と、その底を衝いた昭和十四年との、大麥並に稗麥の作付面積の極端な差異を眺めるとき、この間の事情ははつきりする。即ち

	大麥	稗麥	計
大正二年	六二四、一二七	七二〇、八四三	一三四四、九六九
昭和十四年	三五五、八九一	三六九、六六〇	七二三、五五一

右の數字に依つて知られる如く、僅かに二十七年間に大麥及び稗麥の作付面積は實に六一・一、四一八町歩といふ龐大な減反を來たしてゐるのである。これは、從來麥食の依存者であり、麥の最大の消費者であつた全國農家が、大戰後の好景氣の波に乗つて米食へ一齊に轉向した結果、大麥、稗麥の需要が減少したためであつた。先にその技術において香川、愛媛の兩縣を風靡してゐた吉田式麥栽培法が數年にして脆くも崩れ去つたのは、大戰末期の大正一五六年頃であつた。然し、以上述べたことは主として大麥並に稗麥の栽培についていはれねばならぬことである。これらに反して、一方小麥は隆々たる勢を以てその生産度を昂めつゝあつた。

明治十一年、大正二年及び昭和十四年における小麥の作付面積を再び摘記すれば

明治十一年	三四六、八〇〇
大正二年	四八三、四五九
昭和十四年	七四五、六〇二

この數字が示す如くに、小麥の作付面積は年々擴張され、而も大麥及び稷麥の栽培が急激に衰落を始めた大正二年以降においても、尙その作付面積は増大する一方であつた。

このやうな小麥の隆盛には三つの理由があつた。

第一には大戦以後國民の食生活が非常に變化して小麥の需要を増したこと

第二に明治三三年以來始まつた外國小麥の經濟的侵略に對抗しなければならなかつたこと

第二には農村の經濟更生を計る一助として小麥の栽培が極力奨励されたこと

第一次大戦を契機として日本の經濟活動は極めて活潑となり、いはゆる自由主義經濟のすくすくとした伸長が始まつた。人口は都市に集中され、都市文化は高度に發達した。かうした文化生活の中において、日本人の食生活は漸次複雑化されていつた。その様式の中には従來の米食にパン食が加はり、外國より移入された洋菓子などの需要も多くなり盛んに製造されるやうになつた。明治十四年から大正四年までの五ヶ年平均の日本人の食生活では、その消費量の順位は依然として米、稷麥、大麥、ついで小麥となつてゐるが、大正十四年の五年間では小麥は遙かに稷麥・大麥を凌ぐに至つてゐる。

このやうな小麥の需要を充すには外國より供給を仰ぐより他はない。小麥の移輸入が超過し

始めたのは明治三十三年頃からであつた。それ以前は逆に輸出が超過してゐた。それが更に、大戦終了後の大正十年以降は需要が激増して來たために、大正四、五、六年の大戦時盛んに外國に輸出されて外貨獲得に功績のあつた日本小麥も、遂に内地の需要に應ずることが出来なくなり、莫大量の外國小麥に援助を仰がねばならぬ羽目に立至つた。かうして外國小麥は（それは主として最初は北米、ついで濠洲及びカナダから輸入された）年々その經濟的侵略の強度を加へていつたのである。

昭和七年、政府は小麥増産五ヶ年計畫の實施を發表した。その増産目標は三百萬石であつた。當時、小麥の年高は六百萬石であつたが、需要の激しさは尙その上に毎年二、三百萬石の外國小麥を輸入するといふ餘儀なき状態に至らしめたのであつた。従つて、年産高を九百萬石臺に引上げようといふこの増産計畫のねらひは外國小麥の輸入を防遏し國帑の流出を防ぐにあつたことはいふまでもないが、同時に、農家にとつて實入りのよい小麥を奨して農村の經濟更生を計る意味も含まれてゐた。この増産計畫は、第一年度の昭和八年において既にその目的の大半を達した。即ち小麥の作付面積は昭和八年には一躍十萬町歩を増反し、その收穫も増産目標の半、つまり百五十萬石の増收を見たのである。小麥増産五ヶ年計畫はかうして毎年成功の度を強めてゆき、内地における小麥の自給態勢は確立されたが、それでも尙輸出向加工品の原料としては多量の外國小麥が輸入されなければならなかつた。

かうした小麥生産の目ざましい躍進も何らの犠牲をも要しないで遂行されたのではなかつた。昭和十四年に於ける大麥並びに稷麥の作付面積と小麥のそれとを比較すれば

大・稞麥 七二五、五五一町歩
小 麥 七四五、六〇二町歩

即ち小麥の生産は既に大麥・稞麥の生産を凌駕してゐる。これを麥作の最隆期であつた大正二年のものと同合すれば

大・稞麥 一三四四、九六九町歩
小 麥 四八三、四九九町歩

この數字を睨み合せることによつて、當時の小麥の生産向上が如何なる性質のものであつたかは自ら明かであらう。即ち小麥の増産は大麥及び稞麥その他の作物の作付面積を減反するといふ大きな犠牲の上に組み立てられてきたものであつた。従つて、食糧生産の総合的な立場から見れば大きなプラスとはなつてゐなかつた譯である。そのみならず、大麥並に稞麥の生産はこの爲に低調を來し、消費者は勿論のこと、その生産者たる農民にもこれを輕視する者が多くなり、明治の後期から大正の初期にかけて見られたやうな麥栽培の意欲は漸次消失していつてしまつた。甚だしいのになると、麥栽培を蔬菜や煙草などの風除の爲にしか行はない地方さへ出來てくる有様であつた。

明治・大正・昭和とその時々々の麥の姿を大ざつばに眺めて來たが、今考へられることは大正から昭和へかけての麥は純然たる商品・つまり金もうけの道具であつたといふことである。自由主義經濟のしくみの中ではむしろ當然の在り方であらう。従つて、當時の農業政策も亦農作

技術指導もこの立場からのみ行はれてきた。さきに述べた小麥増産五ヶ年計畫の驚くべき成功はこれを裏書する好例であらう。人々はこの成功ぶりに目をみはつて喜んだのであるが、大麥や稞麥の作付減反には一顧だに與へなかつたのである。又、外國小麥との對抗上、小麥の品種改良には萬全の努力が注がれ、その品種も農林第六十數號の多きに昇つてゐるが、大麥・稞麥については數ふべき品種がないといふ状態であつた。

このやうに麥は商品としてのみ扱はれてきた。前述の小麥増産計畫の達成は、近年の小麥生産高を著しく高めていつた結果、内地の需要を充分に満たした上に尙輸出し得る餘裕さへ生じた。内國小麥を輸出しはじめたのは昭和十二年頃である。昭和十二年といへば正に支那事變の勃發した記念すべき年である。この年においても麥は依然として商品であつた。

昭和の麥 その一

小麥の輸出が始められた年、即ち支那事變頭初の食糧事情はかうであつた。

當時の平時食糧に要する米は毎年八千萬石あればよかつた。これに對して、米の生産狀況はどうであつたかといふに、内地の年平均産米は六千五百万石、毎米穀年度末の持越高は約一千万石、これに加へて臺灣及び朝鮮より約一千五百万石の移入米が可能であつた。即ち合計約九千万石の米が確保出來るといふ見通しであつた。

従つてこのやうな食糧事情の下では、たとひ片方に戰爭をしてゐるとはいへ、小麥の輸出も可能な譯であつた。否むしろ、外貨獲得によつて戦費の一端を負擔するものとも考へられたの

であつた。この輸出を目して『饑餓輸出』と呼んだ人々もあつたが、食糧事情に對する樂觀説が大勢を占めてゐた當時は問題にならなかつた。

昭和十五年には米の實收高は減少して六千八十万石であつた。これは米生産高の届出が行はれたために、實際の收穫よりも少なく報告され、恐らく農家の手持高は全國で約五百萬石に達するものと見積られた。それにしても、同年の朝鮮における不作によつて移入米の可能性が薄らぐと共に、食糧事情が漸次急迫を告げつゝあることがはつきりして來た。

昭和十六年には南方——主としてタイ・佛印——から米を移入することが決定された。外米移入が政策化せられたのである。この年の米收穫は前年以上に悪く、その收穫高は五千五百萬石であつた。これは主として關東地方を中心とした七月の水害のためであつた。かくて同年十二月八日には大東亞戦争が始まつた。

昭和の麥 その二

大東亞戦争以後はわが國の食糧事情は愈々窮屈になり、外米依存も困難になつて、眞剣に食糧自給策が練られねばならなくなつた。このやうな状態のなかにあつて、翼賛壯年團では率先食糧増産の爲に突撃路を拓かんとして、決戦食糧増産運動に突入した。この救國の大運動が展開され、本格的實踐期に入つたのは、昭和十七年初夏であつた。

膨大な形で遂行されてゐるこの聖戰下に、何故食糧の増産が必要であるかを説くのは愚かであらう。然し、何によつて増産を計るか——増産の對象を、米か麥か或は甘藷か、その何れに

置くかは看過出来ない問題である。

増産が食糧の不足量を克服する爲のものであるからには、その對象たり得る條件としては、何よりも先づ増収性の有無が擧げられねばならない。

これを米にとつて考へると、わが國の稲作技術は高度化し、現在の技術ではその増収の限界に達してゐるといはれてゐるが米の増産も勿論閑却することは出来ない。何といつても國民主要食糧の根幹をなしてゐる米については支那事變以來政府は一途にその増産を農地の開發と病虫害に因る減收防止に主力を注ぎ昨年からは農地の改良獎勵を行ふに至つた。しかし栽培技術の改善に依る増収となるとなかなかこれは容易な業ではない。現在、水稻においては精農家と惰農との反當收量に著しい相違がないことがこの間の事情を物語るものである。

ところがこれに反して、麥を見ると、精農と惰農の間には格段の差がある。反收甚しきは一俵、普通で三、四俵といふのがわが國の平均收量であつた。しかるに、少しの創意と工夫を加へ熱意を以つて栽培すれば、優に十俵或は十五俵、中には二十數俵もの反收を擧げることが出来るのであつて、その差の甚しきことこれ以上の作物は少いのである。従つて、現在の配給肥料に自給肥料を増施して樂に五割或は十割の増産が可能となつて來る。

つきに甘藷を考へてみよう。これも大いに飛躍的増産の餘地が残されてゐる。甘藷の反收は從來、せいぜい三百貫程度であつたが、精農家によれば一千貫或は二千貫に收穫を昂め得るのである。

この見地よりして團が採り上げた増産對象は麥と甘藷であつた。即ち麥においては伊藤恒治

氏創案の廣幅薄播法を根幹とする多收穫栽培方法を、甘藷においては丸山方作氏の栽培方式を採用して團の組織力、團員の實踐力によつて急速なる増産に向つてひたむきに奮進したのである。

昭和十七年七月、全國に派遣して現地講習を行ふ爲の講師五〇名が日頃同志切磋増産報國に燃えて先づ團本部で錬成をうけた。いづれも伊藤門下の精銳揃ひであつた。ついで八月には各都道府縣團の指導者養成講習會が開催され、これには全國の都道府縣團より夫々二名宛の受講者が參加した。八月下旬からは全國一齊に現地講習が開始された。かうして増産の突撃路開拓に第一線が力強く打ちこまれた。

『今回の増産運動は食糧増産の必要を説く意味の啓蒙運動でもなければ、農業報國精神の昂揚を直接のねらひとする精神運動でもない。もつと端的に麥と甘藷の飛躍的増産を目指し、食糧の自給を確保せんとする運動であり、その爲に多收穫栽培法の普及徹底を圖らんとする運動である。』

一見それは農業團體の運動と同じであり、團運動の本來の使命から離れた調子の低い運動とも見られる。然し、我々はこの地味な運動の中に團本來の烈々たる使命感が貫かれてをり、その精神が國の柱たらんとする團運動の精神に直接つながつてゐることを銘記したのである。

食糧増産の途には幾多の障碍が山積してをり、その爲に農民の努力にも拘らず食糧増産は國家の要請に應へ得ない情勢にあつた。この障碍の山を突破し、食糧増産の爲に突撃路を開くこと、これがこの團運動の念願とする處である。』(昭和十九年九月四日團報所載)

以上は決戦食糧増産運動開始に當つてその根本精神を説いたものであるが、これに見られる

如く、團のこの運動は單なる技術普及運動ではなく、烈々たる憂國の志に燃え、非常時に當つて國の柱たらんとの念願を具體的に表現する救國運動であつた。

拓かれた増産突撃路

今年の麥豫想收穫高は二千七百萬石(平年作では二千四百萬石)といはれ、翼壯式麥栽培法は明朗な話題を提供してゐる。翼壯同志のこの一年間の惡戰苦闘、體當りの果敢な實踐は今や結實し、まさに食糧増産の突撃路は拓かれんとしつゝある。

勿論、この麥作の上出來は天候に恵まれたり、或は作付面積の増反その他によつても招來されたものであり、これを翼壯の増産運動の手柄に歸することは出來まいが、それにしても、この一歳に亘る同志の涙ぐましい挺身ぶりを想起するときこの好結果はその當然の成果として祝福せずにはおれない。

今年の翼壯式麥栽培法による作付面積は全作付面積の一割、即ち二十萬町歩と推定せられてゐる。静岡縣の一山村に生れたこの麥作技術が僅か一歳にして全國に進出し、よく二十萬町歩の耕地を獲得したのは凡そこれに三つの理由があげられる。即ち

第一には翼壯式麥栽培法が科學的根據を持つてゐたこと

第二にはこの技術に開放性があつたこと

第三にはその普及に當つては翼壯の同志組織が動員されたこと

伊藤恒治氏の多收穫栽培—廣幅薄播法(翼壯式)の考へ方の土臺は植物生産物は『太陽エネルギーの集積物である』といふことにおかれてゐる。このことは氏の發見でも何でも無い。科學的常識の一つである。今われわれは、作物の生長、結實が炭素同化作用によつて營まれることを想起しよう。この同化作用に最も大きな影響を與へるものは日光の照射である。例へば、總て條件を同じくして、播種、施肥その他の管理を等しくしたとしても、日向で育てた麥と日蔭で育てた麥を比較するとき、日蔭の麥は甚だしく生育が不良である。作物が肥料で作れるものならばこのやうな現象は起り得ないはずである。篤農家、精農家といはれる人達はこれらのことを多年の經驗に徴して自ら體得した。従つて彼らは稲においても、馬鈴薯においても、又甘藷においても、畦幅、株間等をことごとく太陽の光線を充分に受けるように考慮して常に決定してゐるものである。

太陽光線の充分な照射によつて作物の炭素同化作用は活潑になる。

伊藤式廣幅薄播法はこの原理を中心に編み出された。即ち

種子は適期に早播きとして生育期間を延長すること。この時、薄播きにして根の伸長を計り、且つ十分に日光の照射を受けるようにすること

土入、踏壓(俗に麥踏み)等の作業によつて根の伸長を促し、且つ均整ある株張をなさしむること

これらの麥作心得にはことごとく太陽光線の照射が考慮されてゐる。

さうした注意の下に育つた麥は細根が多くなり、細根が多くなればそれに比例して莖葉は廣くなる。細根が多いことは水分の供給が大なることを意味し、莖葉が廣くなることは同化作用面

の擴大を意味し、又水分の葉面蒸發量が多くなることから作物の吸肥力を増大することになる。従つて、炭素同化作用は旺盛になる。かうして麥の生育・結實は極めて良好となる譯である。

つきにその開放性を説明しなければならぬが、伊藤氏の麥作研究は村の人にせめて麥でも腹一杯に喰はせたいといふ念願に始つたといへば、大體開放性の意味を推察されよう。氏の居村は山林經營によつてその生活を支へてきた山村である。従つて米麥の食糧は自給できない状態にあつた。これを自給態勢に育てようとした、この研究は昭和五年に始まり、殆ど搖ぎない確信を持てるやうになつたのは昭和十五年だといふ。この間、氏は青年學校に奉職する身であつたのを幸ひに、自分の考へ方を幾通りにも按配しては夫々生徒に實行せしめた。かうして普通ならば年一回しか實驗出來ない麥作法を年に數回も實驗出來たのであつた。

伊藤氏の門下であり、且つ同志である飯島重次郎氏が第一回の複條廣播を試みたのは、昭和十二年秋であつた。このときは從來二、三俵の反收しか得られなかつた畑から九、十俵の收穫を擧げることが出來た。昭和十六年には氏の部落では、それまで部落飯米用大麥の不足七十餘俵といふ惡條件下にある瘠地を征服して、つひに供出麥八十餘俵の割當を完納するといふ異常な成績をみた。このやうな実績はつきつきと伊藤式麥作の門弟を殖やしてゆく結果となつた。

翼壯の力は更にこれを全國に波及させていつた。

翼壯が全國の津々浦々にその同志組織を持つてゐることが今回の如く翼壯式の急速なる普及に考へられた當然の強味であつたが、周知の通り、それは果然遺憾なくその力を發揮したのであつた。翼壯の組織がこれほどまでに強く力を發揮したのは、この増産運動に挺身した團員各

自の、何よりも堅い、團本來の使命感に貫かれた牢固たる信念と翼壯式多收穫栽培法に對する確信があつたが故である。父親の反對を敢然斥けて翼壯式を採用した團員の挿話は各地に聞かれる處であるが、これは團員の信念と確信とが如何なるものであつたかを如實に物語つてゐる。一旦反對した人たちも今年の秋は翼壯式をよるこんで採用することになつた。

このやうな信念と確信の上に立つて、翼壯式による増産運動は緻密且つ周到な計畫の下に展開された。例を和歌山縣にとらう。

和歌山縣團はこの運動展開に當つて、先づ指導體制を整へた。即ち縣團本部では各郡市團に對する指導員各一名宛を配置した。各郡市團本部では町村團に對する指導員を二名宛配備した。各町村團では二、三名宛の指導員がゐる各分團の指導に責任を持つた。各分團は夫々増産實行班に編成され、班長がこれを統率した。

つぎに實踐體制をみると、各郡市團には一反歩宛の指導畑が設けられ、これは團員の共同耕作・共同管理で經營した。同様に、町村團でも一反歩の指導畑が耕種され、團員が共同で耕作し管理をした。更に團員農家は一反以上に翼壯式を必行することにした。一般の農家には麥作付面積の三割に翼壯式を實施せしめた。これには縣當局の惜しみなき協力が與へて力あつたことはいふまでもない。かうして和歌山縣全體が一齊に翼壯式を敢行したのであつた。

この周到な計畫は見事効を奏して、和歌山縣の麥は今年十割増産と傳へられてゐる。

何を學ぶべきか

今度の増産運動の成功から何を學ぶべきか、伊藤恒治氏の口調をそっくりその儘借用すれば——翼壯式々々といふが、何處にもそんな新しい式と名づける程の新鮮味もなければ、又專賣特許になるやうな新技術もないではないか、かう問ふ人がゐる。まことにお言葉のとほり、別に新しい方法でもない。しかし、われわれの問題は形式ではなくて、その精神に在るのだ。

更に或る人は問ふ、一口にいへば何處が普通作と異なるか、と。

私はかう答へるであらう、貴方は麥をごらんになつたことがありますか、眞に麥の生育の姿を見たことがありますか、と。

われわれは永い間、栽培され改良された作物を見、又永い間行はれてきた慣行の栽培技術ばかりに頼りすぎて、作物本來の姿、生育の本來の様相とでもいふべきものに想ひを到すことを怠つたのではあるまいか。

今日世界の激動期に在つて、われわれは日本歴史を改めて讀み直すことによつて、その肇國の精神、國體の本義を探ねて、われわれ臣民のあるべき眞の姿を悟る如くに、人工作物としての作物を今一度、野生自生してゐた時の姿はどうであつたか、それならばどういふ管理をすれば本當か、と新しく考へ直してみる必要があるのではなからうか。

例へば、麥の分蘖の仕方を觀察すると、前に分蘖した丈夫な蘖子が段々外側に出て、内側へ軟かい新しい蘖子が出て來るといふ具合に、まるで親が子供をふところを抱けるが如く、寒氣や吹雪と戦つてわが蘖を愛し育ててゐる姿を見出すであらう。この分蘖相を間斷なく常

に仔細に觀察することによつて、土入れの必要も土入れの分量も自ら考へ出されるのではあるまいか。

又、野生の甘藷は見たことはないが、それが野原に自生してゐた時を想像してみることがよい。數本のつるが地に這つてゐる、そのときの様子を考へてみるに、各葉は皆、炭素同化作用を旺盛にするためには、葉はつねに正しく上向きに展開してゐる必要があるだらう。

そのために、彼らは又、風雨のときにも葉柄の倒れることのないやうに、各莖の節からは根を出して地面にしつかりと根を張り葉柄を支へる必要があることは當然である。

所が、われわれは舊來の慣行によつて、何の考へもなく平氣で三回も四回もいものつる返しをしたものである。

麥の眞實の栽培法を考へてみることによつて、それを他の作物にまで思ひ及ぼしてゆく心構へ、この心構へこそ大切ではあるまいか。

團運動と麥

廣幅薄播麥栽培は團がとり上げたことによつて著しく普及し、且つ世上の大きな關心を呼び起した。

翼壯がこの飛躍的多收穫栽培法を團運動に依り、全国的に普及滲透せしむるやうになつたのは、一昨年秋安藤團長のときからであつた。當時安藤團長は「静岡縣の方々に依つて麥増産に驚異的な実績が示されたことを、私は非常に心強く思ふ。この成果は決して偶然ではなくし

て、永い間の苦勞によつて作物の心をつかみ、土を肥やし、管理の宜しきを得て始めて世に出た粒々辛苦の結晶に外ならないと信ずる。―この人達の「反當三十俵も今一息だ」といふ自信を全國の農民全體の自信とし、これに組織と協同の力を以て裏付けをして増産尖兵中隊の掲げた炬火に、一層の輝きを添へられんことを、全國の農民諸君に對し切に希望して已まない。」といはれたが、昨年六月には山崎農林大臣も、國民運動に依りこの増收方法を以て少しでも増産して欲しいと頼まれたのである。

斯くて萬難を排し、黙々と地下深く掘り下げた本格的團運動に依り、今春は全国各地に飛躍的な翼壯式麥作の成績を擧げるに至つた。

先づ後藤團長が四月二十九日より三日に亘り静岡縣、五月二十四日東京都、五月二十七日和歌山縣下の麥を視察し、續いて内田農商大臣、安藤内務大臣、東條總理大臣が翼壯式麥作の現地視察をされ、決戦下食糧問題解決のため満悦され、今秋は全国的にこの増産方法を普及するやう決意された。

六月四日の日本産業經濟新聞は「反對や偏見と戦ひ黙々麥と取組む、汗に實つた廣幅式」の見出しで翼壯の努力を讃へ、六月二日毎日新聞は「麥はこれで大增産、全國揃つて實行しよう」と廣幅薄播きに折紙をつけ、三日には「黙々と増産の一途、農道普及に輝く成果」とうたつて翼壯の成功を祝つてゐる、その他東洋經濟等の雜誌など、各方面とも麥について大きな關心を拂つてゐる。農商省でもこれに注目し、全國的普及を決意し、全國農民の精農化運動を起し、堆肥準備を指令し、さらに播種機、土入機などを製作し、これを與ふることになつたと傳へら

れてゐる。

各新聞雜誌等が、いま廣幅薄播に驚嘆の眼をみはるのは、同時にいままでは全國民が未だこれにさしたる注意を拂はなかつたことを示すものである。上來説いたやうに、まことに麥は閑却された、それ以上に麥栽培についての民間技術は閑却されてゐたのである。これを止むに止まれぬ戦時下の要請としてとりあげた創始者及びその弟子の人達には、まことに傳道者的な氣概があつたのであり、これを眞先にとりあげた翼壯にも同じ精神が充滿してゐたのである。翼壯の麥作についての信念は先づこれを基とする。後藤團長はいふ。

私は、生産増強の運動は技術改善の運動ではあるけれども、それはもはや單なる農業技術の改善の問題ではなく、一つの大きな革新運動の實踐的方面を如實に物語つてゐることを痛感した、壯年團員諸君はこの食糧増産の面においても十分なる成果を而もなるべく早い期間に最大の成績を擧げるやう非常なる努力を貸していただきたいと切望する、こゝに翼壯の進む一面の方向があり、こゝにこそ國民の中堅層を占めてゐるわが翼壯の國家に對する大きな貢獻があり得るのである、當面の時局に對應して、こゝに最大の努力を傾注し、翼壯なればこそこれだけの大業を成し遂げることができ、國家は救はれたのだといふほどの實を擧げていただきたい。

後藤團長は別の機會に「世人は出來上つた成績は見るが、それをもたらした苦心と努力についてはなかなか見えないものだ」といふやうな述懐をももらされてゐた。

翼壯の活動は昨年度は主として團員が先づ敢然として翼壯栽培法を取り上げてこれを實踐し

た。これだけでも既に述べたところの勇氣と努力とが必要だつたのであり、舊套に安住したい家族、近隣の間にあつて敢へてこれを果すにはよほどの決心が必要なのであつた。翼壯は團運動として強力に押し切つた。さればこそ今秋においては、全農民への廣幅薄播法の普及は眼さましいものがあらうと想像せられる。土地々々による諸種の條件を勘案した創意と工夫も必要となれば、翼壯の苦心と努力はまさに傳道者的殉教的のものとならう。

しかし、何等の苦心と努力なくして、この技術がたやすく行はれるものならば、敢へて團運動を必要とはしないし一片の官廳の通牒によつても果されよう。

世上には麥栽培は團運動本來の方向とは別個な動きであると見るものもある。

これは決定的な謬見である。

既に團長の言葉にもあるやうに、それは本來的な團運動である。本來的な團運動となる契機は、それが旺盛な増産の氣魄と熱情とを必要とするものであり、翼壯式栽培方法に對する確信と慣行栽培に對して革新性を持つものであり、しかも國家的要請が急速なる麥の増産にあることを考へると團の組織力と團員の逞しい實踐力とに依つて推進されねばならぬ點にある。それは、まさに救國運動である。

しばしばいはれてゐるやうに、一つの活動が團運動となり得るか否かは、その仕事の性質によるのではない、その活動のしかた如何、その活動の最後の目的にある。徒らに技術の末端にだけ眼が限定され、皇國農村の確立を忘れ、維新の道を忘失するが如きことがあれば救國運動としての麥の増産も成功せず。

増産ただ一路

麥の増收性は前述の通りである。

麥と同じく増收性の多い甘藷はその貯藏或は加工、運搬等において相當な準備と困難が伴ふが、麥はその栽培においても苗床の必要がなく、又貯藏、運搬の困難も少ない。これらの點からみて戦時下の食糧確保には最も適當といへるであらう。

麥の増産には二つの方法が考へられる。

第一は栽培面積の増加による方法

第二は單位面積當の收量を増加する方法

第一の方法は最も普通に考へられることで勿論これには異論はないが、増反には農家經濟の立場からいつて、農家の經營上からも又勞力、資材等の關係から見ても自らそこに限度がある。第二の方法はいはゆる多收穫栽培であつて、全農家ごとくが精農家になれば、これにはその限度がない。殊に、古來麥はふところで作れとか、又猫の額で作れとか、或は牛の背で作れとか、いはれて來てゐるが、精農家は皆一様に麥の粗放的栽培を戒めて、集約的増收栽培の必要を力説してゐるのである。

栽培面積の増加、少くとも勞力資材の不足にもかかはらずその減少を來さないためには如何にすべきか、これは戦時下日本農業の根本問題である。共同作業、機械化、農器具の共同使用、適區規模の問題等々多年いはれて來た古くても新しい問題が、戦時下なればこそますます

その解決が迫られてゐるのである。われわれの農業問題への關心と努力はもちろんこゝに注がなければならない。

しかし、だからといつて精農的な努力が不要なのではない。急を要する食糧問題において、參與へられた條件の下に如何にして増産を果すかこそが絶對の要請である。しかも麥については、こゝにこそわが國の食糧事情打開の道があるといはれてゐるのである。再び後藤團長の言葉を引くこととしよう。

米、小麥等の品種改良が進んでゐる今日、大麥の新しい良好な品種は何かといふと一向わからない、さうした品種が作られたといふ話はあまり聞いてゐない、この一事を以てしても大麥作が如何に閉却されてつたかがわかるわけだ

この點は大きな手抜きだつたと同時に、現在栽培の面において品種に關しても技術についても大きな弾力が残つてゐることは疑ひのないところだ、日本の食糧事情の打開は自らあるわけであり、日本の食糧事情は實に恵まれてゐるといへよう。

救國の大精神にいよいよ燃えて來年度こそは徹底的な増産に勵まねばならぬ。人心こゝに牢固たる安定あり、軍需増産はあがり前線は安んじてその全力を振ふ、突撃路先づ開かれるとき全面的な攻撃の氣魄は全軍にみなぎり、如何なる頑敵をも撃滅する、先づ麥においてわれわれは突破口を作らねばならぬのだ。

六月八日の全國團總務會は、午前中を麥の問題に終始し、必ず増産を果すべき氣魄が堂を壓した。そして次の如き増産對策案が議せられた。

一、決戦食糧増産運動方針

大日本翼賛壯年團は昭和十七年團結成以來政府の食糧増産計畫に即應し之が強力なる運動展開の推進に主力を注ぎ來り昭和十八年には全國團都道府縣團及郡市團に決戦食糧増産指導本部を設置し特に甘藷及麥の急速増産の爲め民間の技術的創意（甘藷に付ては丸山式、麥に付ては伊藤式栽培方法を根幹とす）を團員に普及透徹せしめ團の組織力と團員の逞ましき實踐力を通じて之が成果を擧ぐるに努めたり。大日本翼賛壯年團は更に昭和十九年度に於て食糧自給の國家的要請に呼應し其の運動體制を整備し甘藷及麥の飛躍的増産を實現するの方針を樹立し甘藷に付ては目下極力之が運動展開中なり。麥に關しては團は其の組織と團員の逞しき實踐力とを動員するに於ては過去の本運動の成果に鑑み之に依り飛躍的増産を擧げ得ること難からざるを認めたるを以て今秋を期して麥の大増産運動を展開するの諸準備に着手せり。

二、本運動展開の方法

本運動は政府の甘藷及麥の増産計畫並に指導に即應して展開するも團は主として其の組織力と團員の實踐推進力に重點を置き以下の方法に依り之を行ふものとす

1、甘藷及麥の増産の實施指導に關しては團員中特に其の栽培技術に優れたる體驗を有し指導力ある者夫々若干名を中央本部の囑託指導員として各級團の要請に應じ隨時派遣して實地の指導並に講習に

當らしむる外都道府縣團に二名宛及郡市團本部に平均一名宛指導責任者を養成し管内團員の實地指導に當らしむ。

2、本運動展開の爲め甘藷に付ては本年二月以降講習會に依り健苗育成を行はしめ五月―六月移植の實地指導を行ひつゝあり

麥に付ては第一期（五月―八月中旬）第二期（八月下旬―十一月）第三期（十二月―四月）第四期（五月―六月）に分ち夫々準備期、作付完遂期、中間指導期、完收期として運動を展開す

態勢は既に成つた。時を逸せざる準備と、全農民の奮起とがまたれるだけである。いや全農民ではない、全國民である、全團員である。都市團員なるが故に食糧に無關心であることは出來ぬ、しからばまた麥についても深甚な關心を寄せぬことは許されない。全團員、都市たると農村たると、麥についての理解を深くし、麥増産の氣運を全國的に旺盛ならしめねばならぬ。後藤團長先頭に立つて指揮するあり、麥増産はいまや團是であり團方針である。山梨縣東八代郡のごときは、翼壯式に従はざる者は團員にあらずとし、全團員ことごとくこれに努力しつつあると聞く、團は一人残らず再び起つ、それは救國のための蹶起である。あらゆる難關は、われわれの前には何ものでもなく、一身斷乎たる邁進あるのみである。

附 全國麥作（廣幅薄播）普及狀況（昭一九、六、一五）

青森縣 呷町實施 縣團指導員四名、伊藤囑託指導 團員に試験的に實施せしめたる結果成績全部に

互り良好（全縣下に試験地有り）、反當播種量三十四升

東津輕郡後瀧村に於て東北地區指導員の現地視察を行へり同地は海岸砂地にて從來麥作不能視せられたる所なるも今年度豫想四俵程度の見込（播種量一升五合、分蘖一六本—二〇本）、今年は麥増産推進の熱意旺盛なり。

秋田縣 稲作專業にして麥作は昨年度より漸く緒に就きたる程度にして水田裏作として試験的に行へり。

縣下栽培面積四、〇九五町（大麥一、五九四町歩小麥二、四九五町）

收穫可能面積四、〇〇〇町他は麥青刈

伊藤囑託指導、縣北一二名、縣南三三名、中央三三名の指導員を養成せるも適期播付の地なく岩手より種子の供給を受けたる處燻蒸食用のものなりし爲芽十分の一にして成績不良。

岩手縣 三町實施

山形縣 三町實施

宮城縣 試験的に實施したるも反當十三俵豫想のものあり。

福島縣 七、五〇〇町實施 全作付別の一七％に互り普及

茨城縣 三、三三町實施 關係方面との連絡良く縣下に普及、町村團員に一反必行、各郡市別に三名宛指導員を配置し組織的に普及せしめ成績頗るよし。

栃木縣 一、三〇町實施 行方郡穂高村、稻敷郡水穂村（一町五畝個人栽培）太田村（二三俵豫想）等優良地區有り、指導員の養成を組織的に行ひ九〇〇名の町村指導員を養成し團員に必行せしむ縣下に失敗なし、足利郡一八〇町歩栽培、同郡山前村に一〇三町歩栽培し成績良。

群馬縣（純）五〇町實施 四〇回に互り指導者講習會を行ふ、團員必行、碓氷郡團全面的に行へるも八幡村（長官視察）特に成績顯著なり。

埼玉縣 一、八三町實施 單位團に試作田必行、入間郡兒玉郡に廣く栽培せり。

千葉縣（純）三〇町實施 縣下一〇％、團員必行、東葛郡に特に普及し川間村にて二五俵程度のもの有り。

東京都 良、一三二ヶ處調査の結果二〇俵以上のもの四八ヶ處ある豫想なり。

神奈川縣 足柄下郡湯河原町九二％普及、中郡地方に主として普及す。

富山縣 九町實施

石川縣 二、〇〇町實施 能美郡成績よし、品種改良に力點を置く要有り。

新潟縣 調査中。

福井縣 調査中。

山梨縣 縣下三〇％普及し、西山梨、東八代、中巨摩郡等に普及す、各町村に試作田必行、指導員二、

〇〇〇名、

長野縣 篤農團員を中心として試験的に実施す。
 岐阜縣 八、三〇町實施 縣下二〇%廣幅播普及。
 静岡縣 縣下四〇%普及し成績頗るよし。
 愛知縣 八、二〇町實施 東郷村九八%普及大麥二〇一三〇俵のもの多、移植法を又採用す。
 三重縣 團員試験的に實施し成績良好なり。
 滋賀縣 餘り普及されず。
 京都府 (純)一、九〇町實施 縣下二〇%普及せるものと推定、單位團にて試験地を設く。
 大阪府 四三町實施 餘り普及されず。
 兵庫縣 餘り普及されず。
 奈良縣 吾町實施 試験的に實施したる處成績頗る良く本年は急増の見込。
 和歌山縣 八、〇〇町實施 縣團一〇名郡團七名宛、町村には責任指導者一名を養成し各實行組合に増産指導班を置き全面的組織活動に依り滲透を圖れり、關係方面連絡よし。
 全縣下に普及團員一段歩以上必行、消毒は全縣民の勤奉隊により一へり、幅播總反別一九八〇〇町弱四〇%翼壯式に依る。
 鳥取縣 鳥取の震災もあり指導充分に徹底せず水田裏作としての麥作に危慮有りしも成績良好、特に東伯郡由良町、西伯郡日吉津村は大麥二〇俵豫想のものあり、八頭郡大御門村は全村實施し成績良好なり。

鳥根縣 水害の爲運動進展せず安田村(翼壯式)成績頗る良く農家の三〇%以上實施し二〇俵以上收穫確實、本年度は強力推進するの決意有り。
 岡山縣 三〇町實施 成績頗る良好、縣當局との關係良、最高六石見込のもの有り。
 廣島縣 五、四九町實施
 山口縣 餘り普及されず。
 香川縣 七、七六町實施 團運動として徹底せず。
 愛媛縣 全縣下に普及、宇摩郡廣幅播八五%普及。
 徳島縣 縣下四〇%實施。
 高知縣 五、六町實施 團員必行調査に依れば一五〇ヶ處一七一二〇俵收穫豫想。
 福岡縣 全般的に指導充分に行はれず。
 佐賀縣 一、三四町實施 單位團にて試験的に行はるも其の成績良く本年度は急増の見込。
 熊本縣 三、四町實施
 大分縣 二、〇四町實施 縣下三〇一四〇%普及、成績頗る良。
 宮崎縣 一、八五町實施 反當平均收量三石五斗、西諸縣郡は本年三〇%實施豫定。
 長崎縣 餘り普及されず。
 鹿児島縣 六、二町實施 篤農團員二〇〇〇名實施、實施面積二〇〇町、從來反當平均一石以下の處反當平均四石に飛躍す。

昭和十九年七月一日印刷
昭和十九年七月五日發行

(月一回五日發行)

【麥】

定價十五錢
送料六錢

翼贊壯年叢書

第45冊

不許
複製

編輯・發行
兼印刷人

大地山郁太郎

東京都芝區田村町四丁目二番地

印刷所 東都印刷株式會社

(東京六五)

東京都麹町區護國一丁目一番地

發行所 大日本翼贊壯年團中央本部

振替東京一九〇〇〇番

製本控

同第

號

919函

294號

年

月

日

書名

麥

翼贊壯年叢書 45

著者

大日本翼贊壯年團刊

受入

昭和19年

8月

8日寄贈

冊

備考



616.3
D25



15 ㇻ

終

